ボールゲームにおける攻撃と防御の再検討

渡部 颯斗　（東京学芸大学）

１．目的

本研究は、インベージョンゲームにおける攻撃と防御とは何かが依然として不明瞭であるという問題意識に立脚し、攻撃と防御とは何かという、これまで等閑視されてきた問題について再検討することを目的とした。

２．研究方法

如上の目的に迫るため、本研究では文献研究を行った。主に、これまで蓄積されてきた数々のインベージョンゲームに関わる研究や文献を扱った。さらに、インベージョンゲームにおける攻撃と防御が、戦争における攻撃と防御からの派生概念であるとされていることから、「戦争論」についても検討することとした。

３．結果と考察

１）これまでの捉え方の構造

これまで攻撃と防御がいかに捉えられ、理解されてきたのかについて検討したところ、「得点することを目論むか／その阻止を目論むか」「ボールを所有するか／所有しないか」を視点とした捉え方を中心としながらも、複数の捉え方から攻撃と防御が多様に捉えられ理解されているという、これまでの捉え方の構造が明らかとなった。

そして、捉え方によって攻撃と防御とは何かをいかに理解するかが異なることから、捉え方の多様化それ自体が攻撃と防御の理解に矛盾を生じさせている、と考えられた。

２）攻撃と防御の概念規定

概念規定の試みにおいて、「攻撃」「防御」の概念自体の検討からアプローチしたところ、インベージョンゲームにおける攻撃と防御とは、競争する対峙を基盤として成立する概念であることが指摘された。そして、インベージョンゲームにおける対峙では、「ボールを目的地に移動するかさせないか」を競い合うスコアの競争、「ボールを確保するかさせないか」を競い合うボールの競争が生じていることが指摘された。

その上で、「対峙における競争」という視点から、インベージョンゲームにおける攻撃とは「得点またはボールの獲得を目論むこと」であり、防御とは「得点またはボールの獲得の阻止・妨害を目論むこと」である、と規定された。この概念規定から、ボールの所有によって攻撃と防御は区別されないことが理解される。

３）攻撃と防御の認識

本研究における概念規定から、実際のゲームにおける行為はいかに認識されるのかについて検討したところ、概念規定による認識では、ある行為が攻撃とも防御とも認識される場合があることが指摘できた。この認識は、これまでなされてこなかった新たな認識であると言える。

さらに、第三者による客観的立場、行為するプレイヤーや対峙する相手方のプレイヤーによる主観的立場といった、ゲームにおける行為を攻撃あるいは防御と認識する立場は複数あると理解された。それゆえ、攻撃と防御とは客観的にすべてが認識されるような単純な概念ではなく、複数の立場からの認識が絡み合う複雑な概念である、と考えられた。

４．結論

本研究では、インベージョンゲームにおける攻撃と防御とは何かを明確に示した。「対峙における競争」を拠り所としながら攻撃と防御について学習したり、攻撃に焦点化する場合にはボールを所有する側のみではなく、ボールを所有しない側のボールを奪うことについても扱ったりするなど、本研究で得られた知見は、これからのボールゲーム学習を考える１つの視点となるのではないだろうか。

５．主な参考文献

１）G.シュティーラー著：谷釜了正・稲垣安二訳，球技戦術論，新体育，50 (8) : pp.638-645, 1980.

２）カール・フォン・クラウゼヴィッツ著：加藤秀治郎訳，縮訳版戦争論，日本経済新聞出版社，2020.